中日新聞 Web　日刊県民福井
　歴史紡ぐ　石文化
織豊期以降製品増える　　笏谷石は西へ東へ　愛知
2020 年 12 月 12 日 05 時 00 分（12 月 12 日 12 時 16 分更新）

笏谷石（しゃくだにいし）は、中世以降日本海を通じて各地に流通した石材ですが、山を隔てた太平洋側にはあまり広がりません。伊勢湾地域でもほとんど見かけない笏谷石ですが、愛知県は、静岡県や三重県に比べると、やや事例が多いようです。ここではその実態に迫りましょう。

愛知県で最も古い笏谷石製品は、一宮市にある法圓寺中世墓遺跡から出土した五輪塔一式です。石を積み上げて作る集石墓（四号墓）というお墓で出土し、ほぼ完全な状態に復元できます。

地輪の直下には美濃須衛窯産の四耳壺（しじこ）（肩にひもを通す耳がある壺（つぼ））が蔵骨器（骨つぼ）として埋設され、知多窯産の鉢が蓋となっていました。これらは十三世紀前半に焼成されたものであり、かつ五輪塔の形も古いタイプなので、鎌倉時代のものと考えられます。

このような古い笏谷石の事例は全国的にみて珍しく、尾張（愛知県西部）に五輪塔が伝来したことは、越前と尾張の間に密接な関わりがあったと想像されます。

次に、愛知県内に笏谷石製品がみられるようになるのは、織豊期から江戸時代初期の段階です。十六世紀後葉から十七世紀前葉までの約四十年間に流通した製品は、狛犬（こまいぬ）と行火（あんか）と方形浅鉢が中心となっています。

神社に残る笏谷石製狛犬は、三社に合計四対が伝わっています。三重県伊賀市の阿波神社の一対も含め、全て銘文が刻まれており、天正九～元和（げんな）九（一五八一～一六二三）年までに奉納されたことが分かります。

一方、遺跡から出土する笏谷石の狛犬は、高さが十センチ程度の小型品で刻文はありません。おそらく十七世紀初頭のものでしょう。

狛犬以外の笏谷石製品は、大半が清洲城下町遺跡と名古屋城三の丸遺跡から出土したものです。どちらも当時の東海地方随一の大都市だった遺跡です。長さが六センチ程度の小型の行火の身と蓋、および四隅に脚を持つ方形の浅鉢が多く、時期はほぼ十六世紀後葉から十七世紀前葉までに限られます。

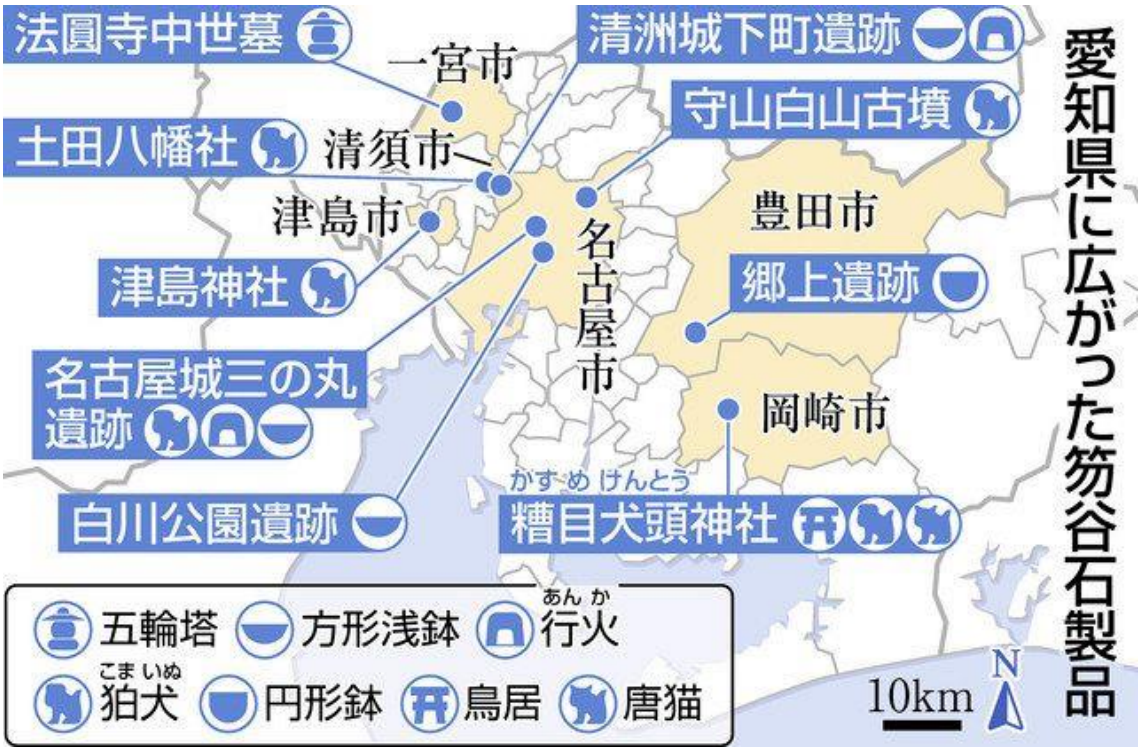
このように、朝倉氏が滅亡した直後くらいから笏谷石が愛知県に運ばれた状況は、まるで織田氏・豊臣氏・徳川氏が越前の銘石の逸品を賞玩したかのようです。実際に、キメが細かく彫刻も繊細な製品が目立っています。

最後に紹介するのは、岡崎市糟目犬頭（かすめけんとう）神社にある笏谷石製の鳥居です。銘文によれば、慶長十（一六〇五）年に岡崎藩主本多康重が寄進し

たものです。岡崎市内最古の鳥居とされ、地元の銘石御影石（花崗岩（かこうがん））の鳥居に先立って製作されたものといえるでしょう。

徳川家は先祖を祀（まつ）る廟所（びょうしょ）などで銅瓦や緑釉陶器を用いる場合があり、三河で笏谷石が使われたのは緑色の石材であることが重要なのかもしれません。本多家が寄進した経緯は不明ですが、越前と三河を結ぶ不思議な縁を感じられます。

（愛知県埋蔵文化財センター主任専門員・鈴木正貴）



中日新聞 Web　日刊県民福井
歴史紡ぐ　石文化

笏谷石は西へ東へ　都市住民の生活起爆剤

2020 年 7 月 11 日 05 時 00 分（7 月 11 日 12 時 58 分更新）

越前中心に交流の歴史

日本を代表する百の歴史文化ストーリー「日本遺産」。その一つが、福井市の一乗谷、福井城跡や勝山市の白山平泉寺、七里壁などに代表される「石の文化」です。福井、勝山両市には全国でも貴重な戦国時代の石垣が多数残り、江戸時代の石垣が今もまちの景色を形作っています。

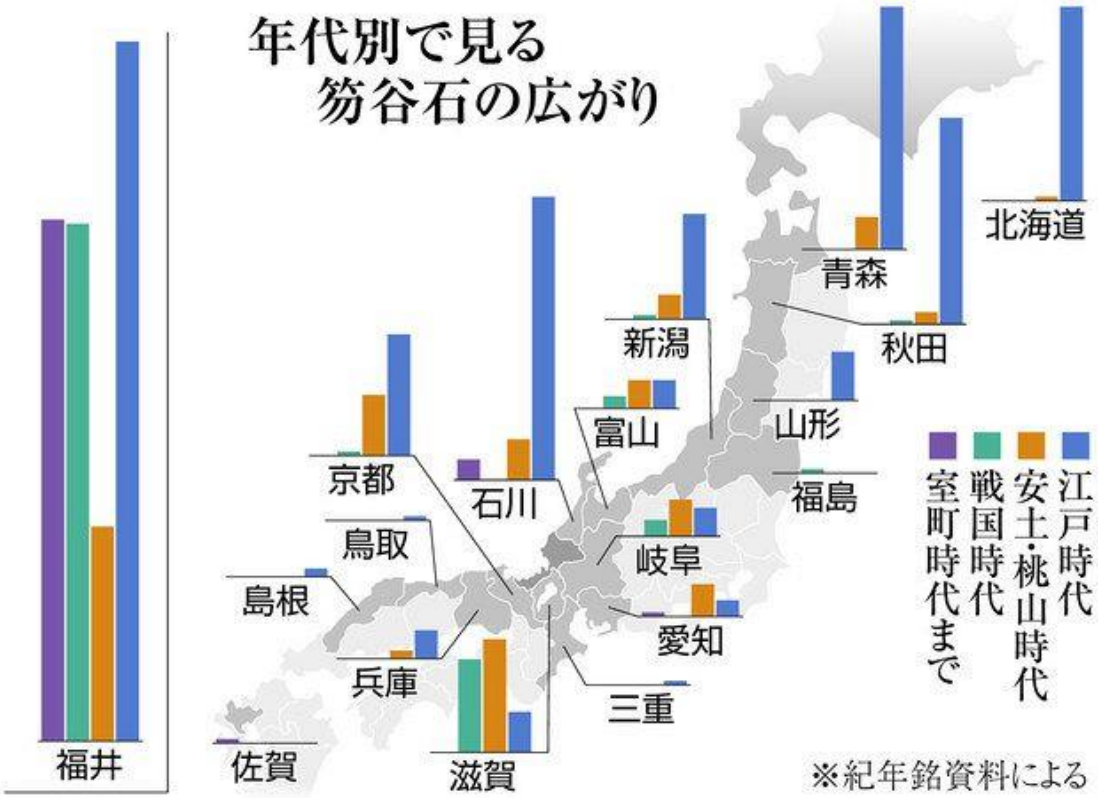
石の文化を支える重要な石材は、笏谷石（しゃくだにいし）。足羽山で産出された笏谷石は、墓石、狛犬（こまいぬ）、鳥居、建物の基礎、敷石などとして各地で用いられました。全国に運ばれた笏谷石は、越前を中心とした交流の歴史を語る証拠です。

日本遺産は、歴史、文化の活用や観光を重視しています。その効果を高めるには、価値や魅力をきちんと知り、発信することが大切です。そこで、日本遺産認定をきっかけに、全国の専門家にそれぞれの地元に残る笏谷石を調査してもらいました。地上に残る墓石、狛犬などだけではなく、遺跡から出土した行火（ばんどこ）＝あんか＝や茶臼といった生活用品を含めて、千六百カ所を超える笏谷石所在地のリストを作成しました。この連載では、その最新成果を全国の専門家の皆さんとともに紹介していきます。

笏谷石の歴史研究はこれまで、「石の鬼」（一九八八年、一乗谷朝倉氏遺跡資料館）、「石をめぐる歴史と文化」（一九八九年、福井県立歴史博物館）、「笏谷石文化」（一九八八年、福井の文化財を考える会）などで、質の高い成果が発信されてきました。現在も笏谷石研究家の三井紀生さんによって精力的な調査が進められています。

古墳時代の石棺を除くと、笏谷石は鎌倉時代に墓石として利用が開始されました。室町時代までに福井県外に運ばれた笏谷石は、愛知県、石川県、佐賀県などわずかな例しかありません。しかし、戦国時代になると土岐氏の大桑城（岐阜県）や浅井氏の小谷城（滋賀県）といった、朝倉氏と特別な関係をもつ場所に狛犬などがもたらされています。笏谷石は、朝倉氏から贈られた越前の特産品、ブランド品と考えることができるでしょう。

この頃、越前国内でも大きな変化がありました。従来の墓石だけではなく、行火、水桶（みずおけ）、茶臼、石臼、風炉など多様な笏谷石製品が現れ、朝倉氏が滅び柴田勝家が北庄に入ると、石瓦や石垣にも多く利用され始めました。一乗谷、平泉寺、北庄といった都市住民の新しい生活が笏谷石生産拡大の起爆剤にな

ったのでしょう。

　その後、笏谷石は日本海流通によって各地に運ばれていきますが、それはまた次の機会に。（勝山市教委学芸員・阿部来）